

九聖人（ワリ・ソング）の聖墓参拝とジャワ世界 Pilgrimages to the Graves of the Nine Saints (Wali Songo) and the Consciousness of Java as a Region

弘末雅士
Hirosue Masashi

Geographically speaking, both Shikoku and Java are single islands. Thus, one is apt to think that socially, as well, the regions known as Shikoku and Java existed from the beginning, but in fact they were formed within relations with the surrounding world. The activities of pilgrimage and visits to sacred graves caused people from various places of origin to move and mingle, providing important opportunities for the construction of regional worlds.

Java can be divided linguistically into the central and eastern Javanese-speaking zone and the western Sundanese-speaking zone, while culturally it comprises the central and eastern area of Java, Sunda, and the northern coastal area with a mixture of various cultures. As Java had more than one language and was not controlled by a unified government until it came under the rule of Holland, Islam, which was widely adhered to on this island, played an important role in forming the regional world of Java in people's minds.

In the Islamization of Java, the Nine Saints referred to as Wali Songo are considered to have played an important role. They are said to have been connected with the establishment and development of the kingdom of Demak, which led the Islamization of Java. Demak established a state on the northern shore of the island at the end of the 15th century, brought about the fall of the Hindu kingdom of Majapahit, which had flourished in eastern Java, and ushered in the age of Islam in Java. People also related a member of the Demak royal family, Sunan Gunung Jati, to the establishment of an Islamic state of Banten in western Java in the first half of the 16th century. In the latter half of the 16th century, the central inland region of Java was made into a state, and the royal family of the kingdom of Mataram held influence in the first half of the 17th century over all of Java except Banten and Batavia, which the Dutch had established as a base. The royal family of Mataram claims that they were of the lineage of the Demak royal family, and that the kingdom of Mataram took shape along with the formation of Java as a region.

The graves of the Nine Saints are objects of worship even today, attracting many believers. The graves of Malik Ibrahim, Sunan Ampel, Sunan Giri, Sunan Drajat, and Sunan Bonan are located in Surabaya, Gresik, Sedayu, and Tuban in eastern Java. The graves of Sunan Kalijaga, Sunan Kudus, and Sunan Muria are in or near Demak in central Java, while the grave of Sunan Gunung Jati is found in Cirebon, which links central and western Java. Their origins, both as men of religion and as the founders of Muslim kingdoms, were recited in the vicinity of their graves. Those stories were included in the records of royal ancestry and developed within the Origins of the Kingdom of Java (*Babad Tanah Jawi*) and the Origins of the Kingdom of Cirebon (*Babad Cirebon*).

This presentation considers these tales of royal ancestry and the way in which the world of Java was created within the exchange among the reciters of the tale through pilgrimage to the graves of the Nine Saints.

1. はじめに－問題の所在－

四国にせよジャワにせよ、地理的に一つの島である。そのため、社会的にも四国やジャワという地域世界が最初から存在したかのように考えがちであるが、地理的領域と社会的領域は、いつも合致するとは限らない。地域世界は、一般にその周辺世界との関係のなかで形成される。自分の姿が自らにわかりにくいように、地域性の観念は当事者だけでは形成されにくく、周辺世界と交流のなかで自己の姿を認識させられ、構築される場合が多い。多様な出身地の人々が交流する巡礼や聖墓参拝の活動は、地域世界を形成するための重要な契機の一つとなるように思われる。

ジャワは、言語的に中・東部ジャワのジャワ語圏と西部ジャワのスダ語圏に分けられ、文化的には中・東部ジャワ、スダ、多様な文化が混淆する北部海岸にしばしば三分化される[クンチャラニングラット1980: 367-422; Geertz 1963: 41-49]。言語的にも単一でなく、オランダ植民地支配に組み込まれるまで統一政体に支配されることのなかったジャワにおいて、北部海岸港市にやって来た外来者によってもたらされ、この島のほぼ全域の住民が信奉するに至ったイスラームは、人々にジャワ世界を意識させる上で重要な役割を担った。

ジャワのイスラーム化に、九聖人（ワリ・ソング）と呼ばれる聖者たちが、重要な役割を果たしたとされる。九聖人たちは、ジャワのイスラーム化の先駆的役割を担ったドゥマク王国の成立に関係したと語られてきた。ドゥマク王国は、ジャワ北岸に15世紀終わりに建国され、東部ジャワで隆盛を誇ったヒンドゥー王国マジャパヒトを滅亡に導いたイスラーム王国である。またドゥマク王国関係者は、16世紀前半に西ジャワのバンテンと16世紀中葉にチルボンに、イスラーム王国を建国した。こののち16世紀の後半に中部ジャワの内陸部にイスラーム王国マタラムが建国され、ドゥマクも併合して17世紀前半にバンテンとオランダ東インド会社の拠点バタヴィア以外のジャワ島全域を影響下におくにいる[Ricklefs 1981: 33-44; 池端 2008: 93-94, 107 and 115-117]。九聖人は、このマタラム王国の王統記『ジャワ国縁起（ババッド・タナ・ジャウイ）』（17世紀前半期に原型成立）にもとづき、マリク・イブラヒム、スナン・アンペル、スナン・ボナン、スナン・ギリ、スナン・ドラジット、スナン・ムリア、スナン・クドゥス、スナン・カリジャガ、スナン・グヌン・ジャティが一般にあげられる[今永 1987]。

『ジャワ国縁起』によれば、マタラム王家はマジャパヒト王家の血統を引き、ドゥマク王室の血縁者であることを唱える。マタラム王国の創設者スナパティは、九聖人のなかでもとりわけ権威が高いとされるスナン・カリジャガより、王家の台頭が神意に叶ったことを告げられたという。『ジャワ国縁起』は、後述するように、ジャワが一つの地域世界としてイスラーム王国マタラムのもとで出来上がったことを唱える[Olthof 1941: 7-82]。

九聖人の墓所は、北海岸に存在する。彼らの墓所の周辺にはモスクが存在し、スラバヤ、グレシク、トゥバン、ドゥマク、チルボンにはイスラーム王国が建国された。前近代における参拝者の多くは、宗教家をはじめ港市を訪れた商人、さらには聖者の力を慕って現世利益を求める人々であったと思われる。墓所の周辺では、聖人の出自やその宗教的活動、さらにはイスラーム王国の建国について今日でも語られる。紙の原料となる植物が生育しなかったジャワにおいて、事柄の伝達に口頭伝承は重要な手段となった。聖墓参拝者の宗教者たちのうちには、聖人の活動や王国の建国、さらにはその子孫たちの系譜について語りを展開させた語り部や吟遊詩人が多くいた。その一部は、『ジャワ国縁起』や『チルボン国縁起（ババッド・チルボン）』など王統記として発展をとげ、今日までマニスクリプトとして残されたものが存在する。

この報告では、そうした語りの展開をみる事ができる『ジャワ国縁起』や『チルボン国縁起』を取り上げ、イスラーム宗教家の活動とともにジャワ世界がいかにして構築されたのか考察したい。

2. ジャワにおけるイスラームの展開

ジャワへのムスリムの来航は遅くとも9世紀ごろから始まっていたと思われるが、住民の改宗が行われ出すのは、15世紀後半にマラッカが繁栄し、その交易ネットワークにそってジャワ北岸港市の支配者が、イスラームに改宗し始めた時からである[トメ・ピレス1966: 316]。なかでも上述した15世紀終わりに建国されたドゥマクは、16世紀初めに全盛期を迎え、ジャワ北岸のイスラーム港市国家の盟主となった。こうしたイスラーム港市国家の台頭により、13世紀終わりから東ジャワで隆盛していたマジャパヒト王国は、内陸部に勢力を後退させられ、1527年ごろ滅亡した。東部ジャワの沿岸部では、スラバヤ、グレシク、トゥバンなどのイスラーム港市国家が独立した。

またドゥマク王の妹と結婚したスナン・グヌン・ジャティは、1520年代にバンテン王国を建国し、西ジャワに14世紀から存在したヒンドゥー王国パジャジャランの勢力を内陸部に封じ込めた。スナン・グヌン・ジャティは、バンテンを後継者のハッサヌディンに譲り、その後西ジャワと中部ジャワとをつなぐ場所に位置するチルボンに移り、1552年頃その地に王国を建国した。また中部ジャワ沿岸部では、16世紀後半になるとジュバラがドゥマクに代わる米の輸出港として栄え始めた[Ricklefs 1981: 34-35; 池端 2008: 107 and 115]。

こうしたジャワ北岸港市の隆盛に対応して、16世紀後半になると中部ジャワの内陸部の穀倉地帯にパジャンさらにはマタラムが台頭した。このうちマタラムは、スナパティ（在位：1584～1601）の時代にパジャンを併合し、さらにデウマクやジュバラも影響下においた。スナパティのあとを継いだクラブヤックさらに第三代アグン（在位：1613～46）の時代、マタラムは東部ならびに西部ジャワに影響力を拡大した。アグンは、1619年にトゥバンを影響下におき、1624年にマドゥラ島、翌25年にスラバヤを陥落させた。アグンはさらに西ジャワのオランダが拠点をおくバタヴィアと対立するに至った。1628年～29年マタラムは2度にわたってバタヴィアを包囲したが、オランダ船の攻撃により食糧の供給を絶たれ、バタヴィア攻略はならなかった。しかしアグンの攻勢は続き、1630年代にはジャワ東端部のパナルカンやバランバガン、西ジャワのチルボンさらには内陸部のプリアンガンも影響下においた。西ジャワ港市のバタヴィアとバンテンをのぞくジャワのほとんどが、マタラムの影響下におかれたのであった[Ricklefs 1981: 40-44]。

これまで北岸港市を拠点に展開したイスラームが、マタラムの支配するジャワ内陸部でも盛んになった。アグンは、1633年に従来のシャカ暦に代えてイスラーム暦を導入した。また自身もメッカに使節を派遣して、1641年にスルタンの称号を獲得した。マタラムの隆盛は、ジャワの広域にイスラームを広める上で重要な役割を担った。

3. 『ジャワ国縁起』における九聖人とジャワ世界

アグンの時代に原型ができたと言われる『ジャワ国縁起』は、ジャワ世界の成立をイスラームの展開と連関づけて語る。

それによると、人類のはじまりはアダムであり、アダムの孫アンワスの子孫たちが、預言者ムハンマドの系譜となりイスラームを信奉していく一方で、もう一人の孫のヌルチャハヤは異教の道に入り、インド人やジャワ人の先祖になったという。インドのパーンダワ一族の末裔ジョヨボヨが東部ジャワに移り、クディリに王朝を開いたときからジャワ世界が始まるとされる。そののち縁起の話の舞台は、西ジャワのパジャジャラン王国に移る。パジャジャラン王国の第五代王パムカスの時代、王は長男に王位を奪われ、次男のスルが東ジャワに移り、マジャパヒト王国を建国したとされる。このスルがパジャジャランを去るとき、元パジャジャラン王女で、西ジャワの山岳部で苦行の末に霊的存在になったチュマラ・トゥンガルが、彼を支援することを約束したという[Olthof 1941: 7-17]。

史実としては、10世紀からクディリを中心に東部ジャワにヒンドゥー王国が展開しはじめ、その後拠点が同じ東ジャワのシンガサリさらにマジャパヒト(1293~1527年頃)に移動する。一方パジャジャラン王国は、14世紀前半に建国され、西部ジャワ内陸部を拠点に、1579年頃まで存在したヒンドゥー王国である。史実としてジャワの東西でそれぞれ並存していたパジャジャラン王国とマジャパヒト王国を、縁起はマジャパヒトの前にパジャジャランを展開させ、マジャパヒトをその後継者として両者を連関させる。

このマジャパヒト王国は東部ジャワを拠点に繁栄した。縁起によると、マジャパヒト王ブラヴィジャヤの時代に王と中国王妃との間に生まれたラデン・パタは、チャンパー王女を母に持つラデン・ラフマツ(スナン・アンベル)に導かれ、イスラームに改宗した。このスナン・アンベルは、マリク・イブラヒムの甥にあたり、マジャパヒト王よりイスラームの布教を許され、スラバヤに居を構えていた。ラデン・パタは、父親ブラヴィジャヤに臣従の礼を求められたが、王がイスラームを受容することを拒んだので、マジャパヒト王国を滅ぼし、ドゥマクにイスラーム王国を建国したという。ドゥマクが建国されたのは、15世紀終わりであり、史実としてのマジャパヒトの滅亡(1527年頃)と一致しないが、縁起は、ドゥマクをはじめとするイスラーム勢力がマジャパヒトの勢力を凌駕したことを語っていると言えよう。

ラデン・パタをイスラームに導いたスナン・アンベルの弟子には、スナン・ギリ、スナン・ボナン、スナン・ドゥラジャツがいた。このうちスナン・ボナンは、ジャワ民衆のイスラーム化に大きな貢献をなすこととなるスナン・カリジャガをイスラームに導いたことを、縁起は伝える。それによると、スナン・カリジャガはラデン・サイドと呼ばれた人々から恐れられていた悪党で、彼自身も悪行を後悔していた。そんな折、ラデン・サイドはスナン・ボナンと出会い、今度彼が来るまでひたすら瞑想にふけるように勧められたという。二年に及ぶ瞑想の後、彼はボナンと再会し、改心を認められた。以降、彼は人々からスナン・カリジャガ(川のそばで修行していたことにちなんで、「川の親分」と呼ばれるようになった。

スナン・カリジャガはドゥマクのモスク建設に寄与するとともに、この地を拠点にイスラーム布教につとめた。ドゥマクのモスクの建設の際には、ジャワからすべてのワリ(イスラーム聖者)が集ったという。ワリたちがメッカの方向を正しく定めることに難渋していたとき、スナン・カリジャガだけが、神意を受けて正確にそれを定めることができた。スナン・カリジャガは以降、九聖人の中でも最高の権威を有する者として語られた[Olthof 1941: 31]。

ドゥマク王国の繁栄は、やがて内陸部のパジャンに移った。パジャンのスルタンは、スナン・カリジャガの弟子であった。同じ頃、ジョクジャカルタの周辺のマタラムの地に、パマナハンがパジャンのスルタンの命を受け、拠点を構えたという。縁起は、パジャンのスルタンもパマナハンも、ともにドゥマク王家の血縁者としている。マタラムは、パマナハンの息子スナパティの時代に勢力を拡大した。縁起によれば、スナパティは、南の海を統べる女王ニヤイ・ロロ・キドゥルより加護を約束され、またスナン・カリジャガよりマタラムの台頭が、神意に叶っていることを告げられたという。ここにスナパティは、パジャンに戦いを挑み、これを併合する。

以上が、マタラムの建国にいたる縁起の内容である。マタラム王家をマジャパヒトの血統を引くドゥマク王室の血縁者と位置づけ、九聖人のなかでとりわけ権威の高いとされるスナン・カリジャガより王国の建国を正統化されたとする。

一方マタラムの建国者スナパティは、スナン・カリジャガの預言とともに、南海の女王ニヤイ・ロロ・キドゥルの加護を得たことを唱えている。このニヤイ・ロロ・キドゥルは、かつてチュマラ・トゥンガルと呼ばれ、苦行の末に超自然的霊となった元パジャジャラン王女で、西ジャワの山岳部から南の海（インド洋）に住むようになったとされる存在であった。中部ジャワ内陸部の穀倉地帯に建国したマタラムにとって、降雨をもたらすインド洋からの風、また水をもたらす大地を具象する山は重要であった。ニヤイ・ロロ・キドゥルは、ジャワの山岳部とインド洋を結びつけるモンスーンの力を象徴したものといえよう[弘末 2004: 86 and 111]。歴代のマタラム王は、王宮の一室にニヤイ・ロロ・キドゥルとの交信の部屋を設け、その加護を取りつけようとした。

そして彼女の出自をパジャジャランとしている点は、ジャワ世界の観念を形成する上で重要である。史実としてパジャジャラン王国は、1579年頃にバンテン王国に滅ぼされた。しかし、その後のアグンの時代マタラムは、パジャジャランの存在した西ジャワ内陸部を支配下においた。また西ジャワ内陸部と交易関係を有したチルボン王国もその影響下においた。マタラムは、西ジャワの中枢部を影響下においた正統性をニヤイ・ロロ・キドゥルをとおして主張した。縁起は、マジヤパヒト建国以前に西ジャワで展開させたパジャジャラン王国を、ふたたびマタラムの建国と関係づけ、ジャワ世界の成り立ちを完成させたのである。

4. 『チルボン国縁起』ならびに『サコンダルの書』にみるジャワにおけるオランダ人

『ジャワ国縁起』にパジャジャラン王国を登場させる背景を考える上で、この地域に影響力を行使していたチルボン王国の役割を無視することはできない。

『チルボン国縁起』は、そもそもチルボン王国の創設者スナン・グヌン・ジャティの母親が、パジャジャラン王女であったとしている。それによると、彼女は兄に伴われてメッカ巡礼に行き、その際パニスライル王に見そめられたという。その結果生まれたのが、スナン・グヌン・ジャティである。成長したスナン・グヌン・ジャティは、ジャワに戻り、スナン・アンベルからチルボンを治めるよう命じられたという。スナン・グヌン・ジャティは、バンテン、ジャカルタ、プリアンガンを勢力下においた。そしてふたたびパジャジャランの故地を訪れ、その地の女性と結婚したという[Rinkes 1911: 7-17]。

16世紀中葉に建国されたチルボンは、西ジャワの米や胡椒さらに木材の積み出し港であり[“Cheribon” 1917: 476]、これらの製品の生産地となる内陸後背地との関係の構築は重要であった。『チルボン国縁起』は、建国者の母ならびに配偶者の一人がパジャジャランの関係者であることを唱える。

のちにマタラム王国は、アグンの時代にチルボンならびに内陸部のプリアンガンを影響下においた。『ジャワ国縁起』においてスナン・グヌン・ジャティは、スナン・カリジャガと義兄弟であったとされ、重要人物として位置づけられている。また『ジャワ国縁起』に元パジャジャラン王女のニヤイ・ロロ・キドゥルの登場すること自体が、マタラムの西ジャワ支配の正統化であった。マタラム王家は、チルボン王家の語りを吸収し、より抽象化したのである。

そして1618年に拠点をかまえ、1628・29年のマタラムの攻撃を退けたバタヴィアのオランダ人も、このなか位置づけられた。『チルボン国縁起』は、バンテンと勢力抗争したマタラムが、オランダの助けを借りて勢力の助長をはかったとする。そしてのちにバンテンやチルボンもマタラムに対抗するためオランダに助けを求め、よってオランダがジャワに拠点をもち、チルボンもマタラムののちオランダの影響下に入ったことを語る[Rinkes 1911: 23-24]。史実としてチルボンは、1677年以降オランダの影響下に入った。

一方1628年・29年にバタヴィア攻撃を行い失敗したマタラムは、バタヴィアのオランダ人を無視できない存在と認識するようになる。『ジャワ国縁起』では、バタヴィアを陥落させることのできなかったマタラムが、オランダ人のジャワ到来を神の意志とみなし、将来マタラム王家の子孫を助ける存在とみなしたとされている[Olthof 1941: 143]。史実として、アグンの時代マタラムはオランダと対立したが、アグンのあとを継いだアマンクラット1世（在位：1646～77）は、オランダとの交易関係を形成した。またアマンクラット1世の晩年に起こったマタラム王家に対するトルーノジョヨ反乱（1674～79年）でマタラム王国の王都は、反乱軍の前に陥落した。アマンクラット1世は逃亡中に死亡し、代わって王位に就いたアマンクラット2世（在位：1677～1703）は、オランダに援助を求めた。オランダはこのとき、マタラムからプリアンガンとスマランを割譲された。オランダは、アマンクラット2世を助け、トルーノジョヨ軍を一掃した。チルボンがオランダの影響下に服したのも、この時であった。

また18世紀に入ると、オランダはマタラム王家の三度の王位継承戦争に介入した。結果としてマタラム王国は三王家に分裂した。オランダは、マタラムの王位継承戦争への介入の代償として、ジャワ北部海岸での勢力を拡大した。しかし18世紀当時のオランダの力では、中部ジャワ全域までその影響下におくことは不可能であ

った。オランダは、中部ジャワの王国の存在を認める方針を採った。

こうしたなかで、分裂したマタラム王家のなかでも18世紀後半に開墾地を増やし、政治経済的にも安定したジョクジャカルタのスルタン王家は、バタヴィアのオランダ人をバジャジャラン王家をとおして、血縁関係にあると位置づけた。19世紀のはじめにジョクジャカルタのスルタン王家が作成した『サコンダルの書』によれば、オランダがバタヴィアに拠点を構えた時の東インド会社総督のヤン・ピーテルスゾーン・クーンの母は、バジャジャラン王家の出身であるという[Ricklefs 1974: 377-402]。

それによるとオランダの地のマブキット・アムピンの王は、12名の妻を有していた。そのうちの一人の妻は、身ごもったのちに、貝を産み落とししたという。そのなかより、バロン・スクムルとバロン・カセンデルが生まれた。バロン・カセンデルは、成長するとスペインに赴いた。カセンデルは、スペイン王のため数々の軍功をたて、ついに王の跡を継ぎ、次のスペイン王となったという。スペインはカセンデルの元で栄えたが、カセンデルは精神修行の旅に出たくなり、王位を兄のスクムルに譲ろうとした。しかし、他の兄弟たちの反対を受け、結局父親のマブキット・アムピン王に王位を譲った。父親は、兄弟たちの不和を諫め、一致団結することを説き、この結果オランダ東インド会社 Kumpni が結成されたという。

カセンデルと他の兄弟たちは、そこでジャワに赴いた。当時ジャワはマタラムの開祖スナパティの時代であり、四人はスナパティに仕え、マタラムを繁栄に導いたという。一方、スペインにいたスクムルも商売のためジャワに出航し、ジャカルタに到着し、その地の支配者に歓迎された。

その頃、西ジャワのパジャジャラン王国は、イスラームを信奉するジャカルタの支配者にすでに滅ぼされていたという。パジャジャラン王家の王女の一人は、山岳地域に逃げ、そこで聖者と結婚し、一人の娘をもうけた。その娘はたいへん美しく、ジャカルタの支配者は彼女を娶ろうとしたが、彼女の子宮から発する炎のため、叶わなかった。そこで彼女は、ジャカルタの支配者からスクムルに売り払われた。スクムルは彼女をスペインに連れて帰り、やがて二人の間にジャンクンが生まれた。

ジャンクンは成長すると、母の出身地がどこか尋ねた。母親は、出身がパジャジャランであり、ムスリムのジャカルタ王によって滅ぼされたことを打ち明けた。そのためジャンクンは、ジャカルタ王を討つべく、ジャワに出発した。ジャカルタに到着したジャンクンは、ジャカルタ王と戦いとなった。激戦の末、ジャカルタ王は、ジャンクンにジャカルタを譲らざるをえなかった。ジャカルタ王は、南部の山岳地に退き、そこで元パジャジャラン王女のことを思い出し、悲嘆に暮れたという。

以上が、オランダがジャカルタに拠点を築く経緯を語ったものである。マブキット・アムピンがオランダのいかなる場所を指しているのか明らかでないが、オランダとスペインとの関係やオランダ東インド会社の設立、さらにはジャンクンがジャカルタにやってきたいきさつが、スルタン王家の枠組みをとおして語られている。ジャンクンの父親が貝の中から生まれ、一方母親の子宮から炎が発せられていたことは、彼の両親が通常の人間を超えた強力な霊力の持ち主であったことを示している[Berg 1965: 115-116; Anderson 1972:16-18]。このジャンクンとは、バタヴィアのオランダ東インド会社の拠点を確立し、またマタラム軍と対峙した総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーンその人である、とスルタン王家はみなした。そしてジャンクンの一族は、マタラム王家の隆盛を支えた人々であったとした。

史実としてパジャジャラン王国を滅ぼしたのは、バンテン王国であるが、そのバンテンも1680年に王位をめぐる争いが生じてオランダの介入を招き、1682年以降オランダの影響下におかれた。『サコンダルの書』は、バンテンやジャカルタを支配したスナン・グヌン・ジャティやその後継者勢力をジャカルタ王で表現し、元パジャジャラン王女の虐待がオランダの到来を招いたとした。マタラム末裔のスルタン王家は、オランダが西ジャワを支配する正統性を、パジャジャラン王国と関連させて語ったのである。

5. 聖墓巡礼と縁起の語り

イスラームがインドネシアに受け入れられていく第一段階として、イスラーム神秘主義教団が重要な役割を担ったことは、しばしば議論されてきた[Johns 1961]。本報告で登場したワリ・ソングは、カーディリー教団に属していた可能性が高いことが指摘されている[今永 1987]。イスラーム神秘主義教団は、その創始者とムハンマドとの関係さらにはその教団の活動を担ってきた聖者たちの系譜を、代々語り伝えてきた。ワリ・ソングの活動また彼らとジャワのイスラーム王国の建国をめぐる話も、そうした語りであった。そしてそれが、王家の宮廷の語り部にも取り入れられた。『ジャワ国縁起』や『チルボン国縁起』などは、その典型である。

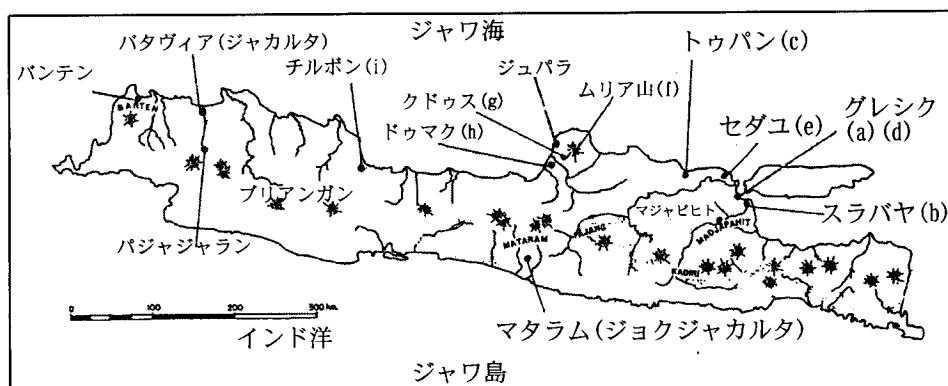
ジャワではイスラーム以前のヒンドゥー時代にも宮廷詩人が存在した。マジャパヒト王国時代に『ナーガラクルターガマ（王国の事跡の伝）』を作成した宮廷詩人プラパンチャなどは、その代表である。ヒンドゥー王

国時代の語りにも「ジャワ世界」の観念は存在するが、それが常にインドとの対比の中で語られたことはすでに指摘されているとおりである[青山 1997]。またマジャパヒトから独立していた西ジャワのことについては、そこではほとんど意識されていない[Mpu Prapañca: 1995: 5]。ジャワの人々が、複数の他者との交流のなかでその地域世界の観念を構築するのは、イスラームを受け入れて以降である。そこでは、ヒンドゥー時代に転生のモチーフで語られていた出来事が、系譜をとおして時系列のなかで展開されることとなり、西ジャワもふくめジャワ世界が展開することとなる。

ジャワをめぐる本報告は、広域秩序原理の展開と個別世界の形成に関して、四国の場合とも連関性を有しているように思われる。八十八カ所巡礼の基盤をなす仏教と、四国という地域性とが緊密に連関しながら展開を遂げてきたように、ジャワにおいてもイスラームとジャワの地域性の構築は、表裏となって進行した。『ジャワ国縁起』は、マタラムのイスラーム受容と、ニヤイ・ロロ・キドゥル（かつてのチュマラ・トゥンガル）の存在をからめている。ニヤイ・ロロ・キドゥルは、イスラーム時代以前から信仰されていた対象ではない。イスラームの導入に際して、マタラム王家がジャワ的な特質を構築し、これとイスラームとを結びつけたのである[弘末 2003]。四国遍路ならびにジャワの聖墓参拝の根底をなす仏教やイスラームの広域秩序原理の展開と、個別的な地域観念の形成は、人々の交流をとおして相互に連関する興味深い事例が提示されているように思われるのである。

ワリ・ソング(九聖人)聖墓

- (a) マリク・イブラヒム
- (b) スナン・アンベル
- (c) スナン・ボナン
- (d) スナン・ギリ
- (e) スナン・ドラジット
- (f) スナン・ムリア
- (g) スナン・クドゥス
- (h) スナン・カリジャガ
- (i) スナン・グヌン・ジャティ



参 照 文 献

- Anderson, B. R. O'G. 1972 "The Idea of Power in Javanese Culture", C. Holt (ed.), *Culture and Politics in Indonesia*, Ithaca and London.
- 青山亨 1997「古代ジャワ社会における自己と他者」辛島昇・高山博編『地域の世界史2 地域のイメージ』、山川出版社
- Berg, C. C. 1965 "The Javanese Picture of the Past", Soedjatmoko, Mohammad Ali, G. L. Resink and G. McT. Kahin (ed.), *An Introduction to Indonesian Historiography*, Ithaca and London.
- "Cheribon" 1917, *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*, vol.1, (The Hague and Leiden).
- Geertz, H. 1963 "Indonesian Cultures and Communities", R. T. McVey (ed.), *Indonesia*, New Haven.
- 弘末雅士 2003『東南アジアの建国神話』、山川出版社
- 弘末雅士 2004『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序』、岩波書店
- 池端雪浦編 2008『新版世界各国史6 東南アジアII』、山川出版社
- 今永清二 1987「ジャワのイスラム化に関する一試論」『史学研究』177
- Johns, A. H. 1961 "Sufism as a Category in Indonesian Literature and History", *Journal of Southeast Asian History*, vol.2, no.2
- クンチャラニングラット編 1980『インドネシアの諸民族と文化』（加藤剛・土屋健治・白石隆訳）、めこん
- Mpu Prapañca 1995 *DAŚAWARNANA (NĀGARAKRĪTĀGAMA)*, (trans. by S. Robson), Leiden.
- Olthof, W. L., (ed.), 1941, *Babad Tanah Djawi in proza Javaansche geschiedenis*, The Hague.
- Ricklefs, M. C., 1974, *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi 1749-1792: A History of the Division of Java*, London, New York, Toronto and Kuala Lumpur.
- Ricklefs, M. C., 1981, *A History of Modern Indonesia: c. 1300 to the Present*, London and Basingstoke.
- Rinkes, D. A., (ed.), 1911, "Babad Tjerbon: Uitvoerige inhoudsopgave en noten door wijlen Dr. J. L. A. Brandes, *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*, vol.59, (Batavia and The Hague).
- トメ・ピレス 1966『東方諸国記』（生田滋・池上岑夫・加藤栄一・長岡新治郎訳）、岩波書店

本報告は、平成19～21年度科学研究費補助金（基盤研究(B)一般「四国遍路と世界の巡礼 その歴史的諸相の解明と国際比較」：研究代表 内田九州男、課題番号：09320097）による研究成果の一部である。